



Title	結果構文・結果表現の意味論—日本語・英語・ロマンス語の比較に基づく研究—
Author(s)	濱本, 秀樹
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 濱 本 秀 樹 ）	
論文題名	結果構文・結果表現の意味論 — 日本語・英語・ロマンス語の比較に基づく研究 —
論文内容の要旨 因果関係は世界に満ち溢れている。それがなくては事象を関係づけられないために「因果関係は世界を束ねるセメントである」と哲学者のHumeは述べている。その因果関係を描写する手段の一つが結果構文である。結果構文は長期にわたり言語学界において広範な議論の対象であり続けてきた。このことはこの話題に関する著作や論文の多さが証明してくれる。この論文の目的はこのすでに取り上げられて久しいこの話題に今までにない新しい観点を導入することである。 第一の観点は、広範な既存の理論と哲学上の因果関係理論との対応を探ることである。結果構文、結果表現とはどのような現象を示すのかを系統的に考察した上で、これらの現象に関する諸理論が因果関係(<i>causality</i>)をどのように説明しているのかを確認する。それらの理論の問題点に関係すると思われる哲学的因果関係理論であるHume理論、Lewis理論、最新の理論的発展であるHitchcock理論も議論の範囲に収め、対応関係を明らかにする。因果関係理論は結果構文の意味論に密接に結びつくのであるが、既存の学説ではほとんど議論されてこなかった。本論文では、哲学的因果関係論と結果構文との関連性を重視し、真理条件の確定のためには因果関係を構成するCAUSE関数の正確な意味論的規定が必要であることを論じる。これによりCAUSE関数が一枚岩ではなくその因果関係の強弱により階層性があるkとが明らかになるとともに、その階層性と結果構文、結果表現の間に対応関係が観察されることが明らかになる。 2つ目の観点は比較言語学的研究と通時的研究の統合である。日本語、ロマンス諸語（イタリア語、ルーマニア語）と英語を比較することにより、英語以外の言語では、結果構文ではなく同等構文などが担っている意味の領域に英語では結果構文が拡張していったのではないかという仮説を通時的に検討する。通時的観察に関連して「言語変化の理論」を取り入れる。コセリウの言語変化理論(E. Coseriu, 1958)の中心的概念を子細に検討することで、人の伝達活動（パロール）の必要性から生じる変化の要請と、変化に抵抗する規範性を備えた言語（ラング）の動的性質とはどういうものなのかということをも充分認識したうえで結果構文の変化の歴史を整理する。 3つ目の観点は、この発展のプロセスをFauconnier等が提唱するblending理論を援用することで明解に説明することである。この理論は比喩の理解や社会事象に関わる言説などの分析に利用されてきた。これに上述の言語変化の理論を取り入れることで言語の変化を比較し相対的に説明できるようになる。しかしこのblending理論だけではなぜそこで規定するようにプロセスが発動され進んでいくのが明確ではない。人間の推論の一つに帰納でも演繹でもない、「驚き」や「当惑」を解消する原因を探る論理の働きである仮説形成推論をblendingのプロセスに組み込むことでさらに説明力ある理論に再構成することができるとを示す。 4つ目の観点は日本語の結果表現の「ほど」、「まで」の意味論に形式的説明を与えることである。このことで日本語では同等関係がいわゆる強い結果構文の役割の一部を担っていることを説明し、さらに英語の「強い結果構文」についての意味論にもその説明が拡張され得ることを示す。英語の「強い結果構文」のいくらかは直接的な因果関係を表現するのではなく、2つの事象間の意味的スケールでの程度や同等性を伝達する機能を持っているのではないかという仮説を提示する。 以上のように4つの観点を取り上げて議論を展開するが、一番肝心な観点は、今までの結果構文をめぐる諸理論は共時的でありすぎたという反省に基づき、通時的な見解を導入するということにある。これら4つの観点は各章での議論の中心テーマである場合も多いが、さらに章を跨いで相互に関連することもある。そこでこの論文の構成についてより具体的に述べておきたい。 この1章では結果構文とはなにかについて確認するための見取り図を提示する。結果構文の規定も研究者によって幅があり、結果構文の範疇が明確ではなく、議論がかみ合わない場合も存在する。この章では研究の流れを概観	

し、どのような問題が議論されてきたのかを明らかにする。この検討を通じて我々が本論文で研究対象とするべき「結果構文」の範囲、また「結果構文」と「結果表現」の関わりを明確にする。

第2章では、第1章の議論に基づき、日本語と英語の結果構文、結果表現の系統分類を試みる。そこでの結論を先取りしていえば、英語の結果構文については様々な分類が提案されているものの基本的には3分類で概ね特徴を纏められることを提案する。また日本語はいわゆる「弱い結果構文」は存在するが「強い結果構文」は存在しないという通説を原則的には受け入れるのであるが、同時に日本語も英語の「強い結果構文」の意味や機能に対応する表現があることを主張する。これらの表現は結果的複合動詞構文、 S_1 -*hodo* S_2 構文、さらに S_1 -*made* S_2 構文であり単文の結果構文の形式は取らない。これらと弱い結果構文とを合わせ、その機能を基に分類すると日本語の結果表現も概ね3系統に分類可能であることを述べる。英語の3分類と日本語の3分類には完全ではないにせよ興味ある関連性が認められることも指摘したい。

第3章で、第1章でも概観した諸理論を*causality*がどう捉えられているかという観点から精査し、整理していく。手順として形式意味論的アプローチ、語彙概念意味論の説明、さらに構文文法を基礎にした結果構文論を確認していく。それぞれの理論が因果関係(causal relation)をどのように捉えているのかを解明しその長所と強み、さらに問題点を明らかにしていく。

第4章は、第3章の結果構文の諸理論の*causality*の扱いの問題と直接関連する。まず因果関係の哲学的概観から始め、CAUSE関数をどのように理解してきたのかを考察する。これは結果構文の真理条件を明確に示すためには避けては通ることのできない作業である。しかし今まであまり議論されてこなかった。この作業を通じ各理論の提案が結果構文にどの程度適用可能性を持つのかを見てみる。ここではHumeの恒常的継起的因果関係説、Lewisの反実仮想的因果理論、さらに最近の発展形であるHitchcockの構造的等式フレーム理論(SEF theory)を取り上げ、英語の結果構文の持つ*causality*がどの理論によって、どのように説明されているのかを検証する。この作業により、英語の結果構文の3系統が相互にどう関連するかの相対的位置づけもよりはっきりと見えてくる。

1章から4章がこの論文の概念基盤であり、ここで挙げられ可視化された諸論点が5章、6章で独創的な問題点の理解の中に取り入れられ、そこで適切な分析と解決を与えられることになる。

さて第5章は本論文の特徴の一つである結果構文、結果表現の他言語間の比較検証を扱う。日本語は「弱い結果構文」のみならず「強い結果構文」に対応する意味や機能を持つ独自の表現があることは2章で示されるが、さらに日本語によく似た意味的分布を示すイタリア語、ルーマニア語の結果表現との比較対照分析から、それらの結果表現の一部は直接的因果関係を示す構文ではなく、むしろ同等構文とみるべきであるとする新しい観点を提示する。「原因—結果」の関係が程度(*degree*)比較を含む同等関係論でどのように説明可能かを形式意味論的に解説する。

第6章は、本論文の特徴の一つである言語の通時的分析と言語変化の問題を扱う。日本語やロマンス語系諸言語とは異なる性格を持つ英語の結果構文の通時的な進化を辿ることで英語の結果構文が基本的なプロトタイプと考えられるものから歴史的に拡張されて来たことを明らかにする。そしてその特異な発展の過程を説明するために、blending理論を採用することにするがその不十分な面を補完するため、言語変化の理論と仮説形成推論とを組み込む。これにより結果構文の歴史的発展がより明瞭に説明可能になる。また日本語の結果表現も通時的に分析され、日本語独自の「強い結果構文」に対応する結果表現は古代から現在まで連綿と使用されてきており、そこに意味の場の空白がなかったことが英語との大きな違いであることを述べる。

第7章は以上の議論の総括を行う。様々な論点が大きな構図を描くことを説明したい。また今後の展望についても述べる。

特に、因果関係理論からの知見や日本語の結果表現との比較により、英語の「強い結果構文」の一部は意味的には直接的因果関係を表現せず、日本語の固有表現と同じく同等関係を表すものに变化してきていることを再度確認する。そこでの議論は「言語変化は諸言語の歴史における言葉の創造性の表れである」とするCoseriu(1958)の主張を裏付けるものと言えるかもしれない。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (濱 本 秀 樹)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 岡田 禎之
	副 査 大阪大学 教授 神山 孝夫
	副 査 大阪大学 准教授 田中 英理
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 結果構文・結果表現の意味論—日本語・英語・ロマンス語の比較に基づく研究—

学位申請者 濱本 秀樹

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 岡田禎之

副査 大阪大学教授 神山孝夫

副査 大阪大学准教授 田中英理

【論文内容の要旨】

本論文の目的は結果構文の分析に以下の 4 つの観点を導入することである。1 つ目は、既存の言語理論と因果関係理論との対応を探ることである。結果構文、結果表現を系統的に考察した上で、これらの現象に関する諸理論が因果関係(causality)をどう説明しているのかを確認する。本論では、真理条件の確定のためには因果関係を構成する CAUSE 関数の正確な意味論的規定が必要であることを論じる。これにより CAUSE 関数が一枚岩ではなくその因果関係の強弱により階層性があることが明らかになり、その階層性と結果構文、結果表現の間に対応関係が観察される。2 つ目は比較言語学的研究と通時的研究の統合である。日本語、ロマンス諸語（イタリア語、ルーマニア語）と英語を比較することにより、英語以外の言語では、結果構文ではなく同等構文などが担っている意味の領域に英語では結果構文が拡張していったのではないかという仮説を通時的に検討する。3 つ目は、この発展のプロセスを *blending* 理論(Fauconnier and Turner, 1996, 1998, 2002) を用いて説明することである。この理論は主に比喩の分析に利用されてきたが、これにより言語変化を適切に記述することが可能となる。ただし *blending* 理論だけではなぜその融合プロセスが発動され進んでいくのかが明確にはならない。人間の推論の一つである仮説形成推論(abduction)を組み込むことでこの問題は解決できると考えられる。最後の 4 つ目は日本語の結果表現の「ほど」、「まで」の意味論に形式的説明を与えることである。これにより日本語では同等関係が強い結果構文の役割の一部を担っていることを説明し、さらに英語の「強い結果構文」の意味論にもその説明が拡張され得ることを示す。以下、本論の構成を述べていく。

1 章では結果構文とはなにかについて確認する。研究の流れを概観し、どのような問題が議論されてきたのかを明らかにする。この検討を通じて本論で研究対象とすべき「結果構文」の範囲、また「結果構文」と「結果表現」の関わりを明らかにする。2 章では、日本語と英語の結果構文、結果表現の系統分類を試みる。英語の結果構文については様々な分類が提案されているものの基本的には 3 分類で概ね特徴をまとめられることを提案する。また日本語には「弱い結果構文」は存在するが「強い結果構文」は存在しないという通説を原則的には受け入れるが、同時に日本語にも英語の「強い結果構文」の意味や機能に対応する表現があることを主張する。その機能を基に分類すると日本語の結果表現も概ね 3 系統に分類可能であることを述べる。3 章では、形式意味論的アプローチ、語彙概念意味論の説明、さらに構文文法を基礎にした結果構文論を確認していき、それぞれの理論が因

果関係(causal relation)をどのように捉えているのかを確認していく。4章は、Humeの恒常的継起的因果関係説、Lewisの反実仮想的因果理論、さらにHitchcockの構造的等式フレーム理論(SEF theory)を取り上げ、英語の結果構文の持つcausalityがどの理論によって、どのように説明されているのかを検証する。ここまでが本論の概念基盤となる。

5章は本論の特徴の一つである結果構文、結果表現の多言語間の比較検証を扱う。日本語は「弱い結果構文」のみならず「強い結果構文」に対応する意味や機能を持つ独自の結果表現があることは2章で示されるが、さらに日本語によく似た意味的分布を示すイタリア語、ルーマニア語の結果表現との対照分析から、それらの結果表現の一部は直接的因果関係を示す構文ではなく、むしろ同等構文とみるべきであると提案する。「原因—結果」の関係が程度比較を含む同等関係論でどのように説明可能かを形式意味論的に説明していく。

6章は、日本語やロマンス語系諸言語とは異なる性格を持つ英語の結果構文の通時的変遷を辿ることで英語の結果構文が基本的なプロトタイプと考えられるものから歴史的に拡張されて来たことを明らかにする。その特異な発展の過程を説明するためにblending理論に仮説形成推論(abduction)を組み込む。日本語の結果表現も通時的に分析を行い、「強い結果構文」に対応する日本語独自の結果表現は古代から現在まで連綿と使用されてきており、そこに意味の場の空白がなかったことが英語との違いであることを述べる。7章は以上の議論の総括である。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、これまで様々な分析が提案されてきている結果構文に対して、申請者が長年に渡って考察してきた内容をまとめたものであり、これまでとは異なる観点からの独自のアプローチが展開されている。原因行為と結果状態を1つの文にまとめたものが結果構文であるが、そもそもこの構文において認められる「因果関係」とはどのような性質のものであるのか、という問題を詳細に検討した研究は少ない。また、その因果関係をタイプ別に形式化しようとする試みも独自のものである。「弱い結果構文」と「強い結果構文」という2分法や、「構文」という概念に関しても、改めて問い直すことで、結果構文と呼ばれる表現群の全体像を捉え直そうとしている。動詞の語彙的な情報によってもたらされる「弱い結果構文」が表す因果関係は、構文の事例と認める必要はなく、いわゆる「強い結果構文」だけを「構文」と見なし、しかも英語においては「結果構文」が拡張していき、「同等関係」を表すところにまで用法が広がってきていることを指摘している。一方で、日本語、イタリア語、ルーマニア語などは「結果構文」を利用することなく、「結果表現」を利用して各種の因果関係を表し、同等関係を表すことも「構文の拡張」を利用せずに無理なく行っている。このような英語との違いは、英語の結果構文の拡張事例の容認性に大きな個人差が認められるという事実をも説明づけるものであり、説得力がある。

また、日本語の結果表現のグループの中で同等関係を表す表現に登場する、「ほど」の形式意味論的な記述を行い、他の「ほど」との類似性を検討したり、既存の結果表現から新しい結果構文が英語において生じていった過程をblending理論を用いて説明するときに、その新たな言語使用が認められた動機を仮説形成推論に求めようとするなど、申請者独自の視点からの考察の有効性が示されている。

その一方で、そもそも英語がなぜ「同等関係」を表すメッセージ内容までをも「結果構文」という形式によって表そうとしたのか、日本語などと同じように「結果表現」を利用するというオプションを使うだけでは終わらなかったのはなぜなのか、という問題は不明である。また「弱い結果構文」を構文ではなく、結果表現の一種と分類しつつも「便宜上」結果構文と呼ぶのは多少の混乱を招き、読み解くのに時間がかかる説明内容になっていると感じられる部分もある。しかしながら、これらの問題点によって本論文の独自性、新規性が損なわれるものではない。したがって、本論文は、博士(文学)を認めるにふさわしい論文であると認定する。